

第3章 尖閣諸島と自然

戦後、尖閣諸島は南西諸島の一部として米国の施政下に置かれ、1972年（昭和47年）に施政権が日本に返還されます。自然豊かな尖閣諸島は科学者の関心を惹き、米国施政下の時期と沖縄返還後を通じて、動植物の固有種等について日本人による学術調査が行われてきました。

古くから荒い波に囲まれ、人里離れた無人島であった尖閣諸島には、珍しい動植物が生息し、多くの海鳥が飛来します。渡り鳥のアホウドリが繁殖のために尖閣諸島にやってくることはよく知られ、アホウドリは尖閣諸島のシンボリックな存在といえます。アホウドリは沖縄返還の直前に琉球政府が発行した切手のデザインにもなり、人々の記憶に刻まれています。

第三章では、長年の学術調査を通じて捉えられてきた尖閣諸島（ここでは魚釣島、北小島、南小島）の自然の姿と、切手を通じて沖縄の人々に親しまれてきた尖閣諸島のイメージを紹介いたします。



琉球切手「海洋シリーズ第3集(海鳥と海と島)」
1972年（昭和47年）4月14日発行
沖縄県立博物館・美術館所蔵

第4章 石垣市の取組

石垣の人々は、古くから尖閣諸島と関わりを持ち、1895年（明治28年）の領土編入以降は、行政管轄内の一地域として、戦前、米国施政下、そして沖縄返還後現在に至るまで、様々な形で深く関わってきました。

石垣市は、尖閣諸島に関する展示会を開催するとともに、パンフレットや動画を制作し配布、ウェブ掲載する等の啓発のための取組を実施しています。また、尖閣諸島に関する調査・情報収集を行い、環境問題の発生などの状況把握に取り組むとともに、「石垣市海洋基本計画」を策定し、その中で尖閣諸島について必要とされる施策を提言しています。



石垣市は今年の6月、尖閣諸島の字名を「^{あざ}登野城」から「^{とのおしろ}登野城尖閣」に変更することを告示したんですよ！

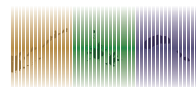
※2020年6月告示、施行は2020年10月

領土・主権展示館企画展パンフレット「尖閣諸島と日本人～開拓と中国からの感謝状をめぐる史実～」

〔展示期間〕2020年7月28日（火）～9月27日（日）（会期を延長いたしました）

〔場所〕領土・主権展示館2F多目的コーナー

〔発行〕領土・主権展示館



領土・主権展示館

NATIONAL MUSEUM OF
TERRITORY AND SOVEREIGNTY

〔所在地〕東京都千代田区霞が関3-8-1

虎の門三井ビルディング1階

〔電話番号〕03-6257-3715



領土・主権展示館 企画展

尖閣諸島と日本人

～開拓と中国からの感謝状をめぐる史実～



はじめに

19世紀後半、欧米列強が東アジアに進出する中で、明治政府は近代的な国家形成のために様々な統治の仕組みを整えることに尽力しました。日本の領土の範囲を明確にすることは、国際社会の中で主権国家としての地位を築く上で重要な取り組みの一つであったといえます。19世紀後半までどの国にも属していなかった無人島であった尖閣諸島は、1895年（明治28年）の閣議決定により、正式に沖縄県に編入され日本の領土となりました。

尖閣諸島は現在、沖縄県石垣市の行政区です。2010年（平成22年）12月、石垣市は日本政府が1895年（明治28年）に尖閣諸島の領土編入を閣議決定した1月14日を「尖閣諸島開拓の日」と定める条例を制定し、この条例の制定を記念して、2011年（平成23年）、2012年（平成24年）の2年度にわたって「尖閣諸島開拓の歴史と自然展」を開催しました。

領土・主権展示館のリオープンに当たる本年、本企画展では、石垣市が開催した「尖閣諸島開拓の歴史と自然展」の内容を元に、最近の研究の成果も加味しながら、尖閣諸島における日本人の開拓の歴史と現在の姿を概観していきます。

展示協力：沖縄県石垣市、石垣市立八重山博物館、沖縄県立博物館・美術館、那覇市歴史博物館

島の写真は魚釣島（内閣官房ホームページ）

第1章 尖閣諸島の開拓

江戸時代の鎖国政策が終わった明治初期の頃、産業や社会の近代化とともに、島国日本の周辺に数多く存在する島々への開拓意欲は活発化し、その行動範囲は急速に拡大していきました。

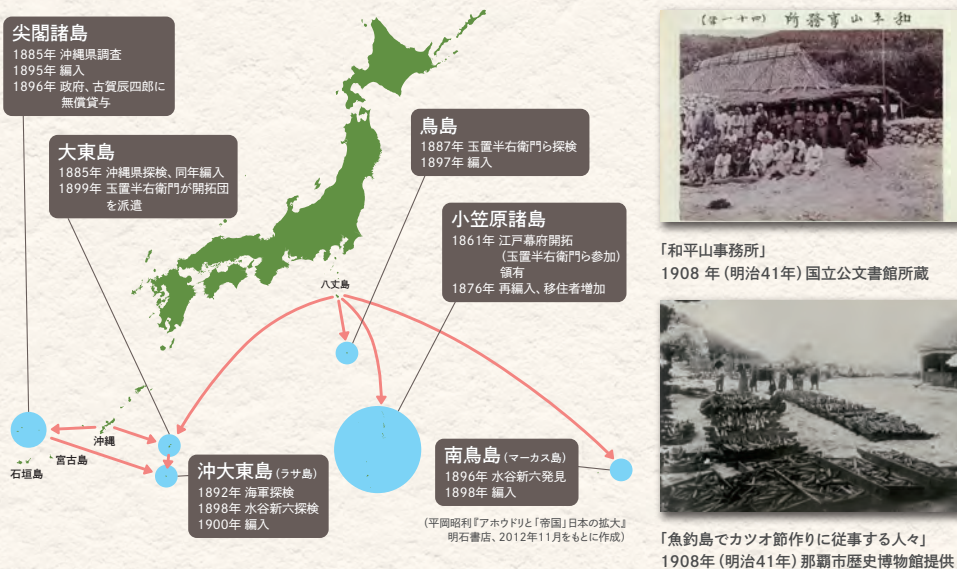
当時、「南洋開拓の先駆者」と称される玉置半右衛門^{はんえもん}は、小笠原諸島や大東島の開拓にも従事しましたが、鳥島においてアホウドリの羽毛の輸出により、膨大な利益を得ました。

1880年代後半から1890年代にかけて、玉置の成功に刺激を受けて無人島探検ブームが起こります。多くの人々が、一攫千金を夢見て南の島々の探検・開拓に挑戦しました。

こうした人々の中に、沖大東島の探検を試み、また南鳥島を発見した水谷新六が、そして尖閣諸島の開拓にあたった古賀辰四郎がいました。これらの島々は、政府による領土編入の試みと相まって、人々の探検・開拓等により、日本の領土に編入されました。

尖閣諸島においては、領土編入の前から日本人による利用が始まりましたが、当時の離島の開拓は決して容易なものではなく、先人の絶え間ない苦労と知恵の積み重ねがありました。

第一章では、尖閣諸島の開拓を、明治初期に行われた先人による無人島開拓の一つとしてとらえ、民間人企業家古賀辰四郎による尖閣諸島開拓の歴史を振り返ります。



横内家文書にみる尖閣諸島

横内家は、江戸時代に彦根藩の藩士として井伊家に仕えた家柄でしたが、第九代当主横内扶^{たすく}が明治維新後に沖縄県官吏となり、以後知事官房などの要職を務めました。「横内家文書」は、横内扶が退職後に持ち帰った、職務の際に扱った文書の控えや写しを含んでおり、明治期の沖縄県政を明らかにするうえでも貴重な資料といえます。本企画展では、「横内家文書」の中から、当時の尖閣諸島への認識がうかがえる書簡2通をご紹介します。

第2章 尖閣諸島における中国船救護の物語

大正時代に入ると、尖閣諸島沖に漂着した中国（当時は中華民国）の船を、尖閣諸島で生活していた人々が救護し、中華民国から沖縄県へ感謝状が贈られるという出来事がありました。

1919年（大正8年）、古賀村の人々が生活していた尖閣諸島沖で、中国船が遭難します。古賀商店の従業員らは31名の中国の漁民全員を救護し、食糧や寝床を提供し、船を用意して無事中国まで帰還させました。

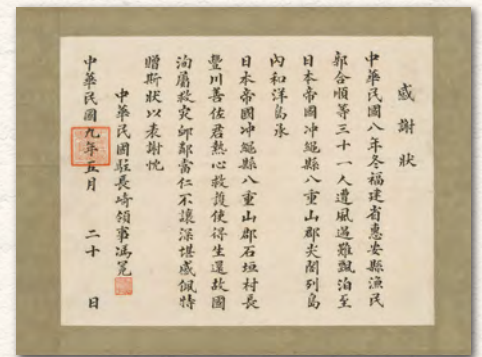
1920年（大正9年）、中華民国駐長崎領事は、中国の漁民を救助した島民や、その他の沖縄の日本側関係者に対して、漂着地である尖閣諸島の魚釣島が沖縄の一部であることを明記した感謝状を贈っています。

感謝状は7通贈られたようですが、現在は当時の石垣村長豊川善佐宛と、石垣村雇玉代勢孫伴宛の2通が石垣市立八重山博物館に所蔵されています。

尖閣諸島に当時人々が生活していたこと、また外国（当時の中華民国）も尖閣諸島を日本の領土と認識していたということは、こうした出来事と感謝状の存在からも確認することができます。



今からちょうど100年前に感謝状が贈られたんだね！



「尖閣諸島遭難救護の感謝状」
1920年（大正9年）石垣市立八重山博物館所蔵

